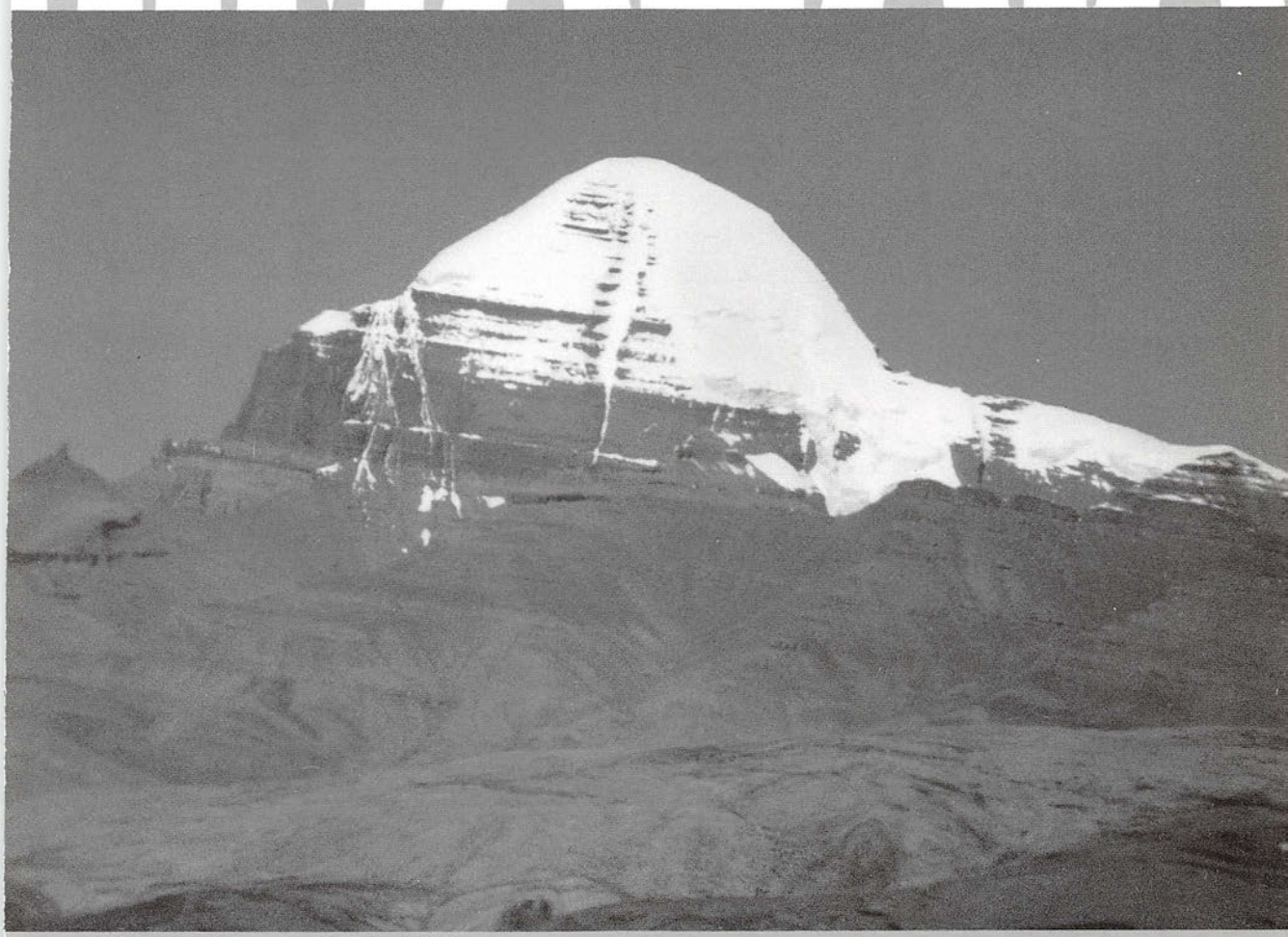
昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成12年4月1日発行（毎月一回1日発行）

ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.341



2000 APRIL

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

2001年ＨＡＪ登山隊隊員募集
中、ネ国境 ヤンラ・カンリ（7,429ｍ）

ガネッシュ・ヒマールと言う名で日本人には馴染み深い山群の主峰がヤンラ・カンリである。

1955年10月24日、スイスの著名な登山家のレイモン・ランベール（41）と、フランスの女流登山家のクロード・コーガン（29）ら３人によって、ネパール側のサンジュン氷河から初登頂された。

60年５月31日、イギリスのＰ.Ｊ.ワレイスとギャルツェン、ノルブ２人のシェルパが主峰の東にあるドームに登頂したが、主峰は断念している。

いまだに第２登を許していないが、今回の計画は、中国領の北面から登頂を目指すもの。北面は1998年のＨＡＪ隊がカバン峰の帰途偵察隊として初めて入山し、登路を探った。手つかずの新鮮な山であり、静かな山行が楽しめる。

意欲ある岳人の応募を期待します。

記

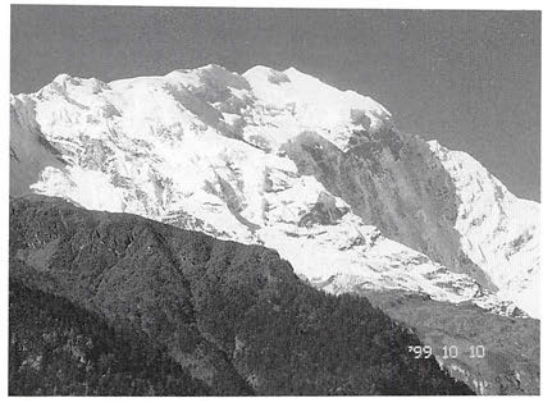
1.期間　2001年９月10日～11月８日（60日間）

2.募集人員　10名程度

3.負担金　100万円

4.資格　冬山の稜線を20kg程度の荷物を持って行動できる登山経験のあること。協調性があること。未知の山に挑むリスクを認識できること。

5.申し込み〆切　2000年６月30日



▲ヤンラ・カンリ北面。中央左上から右下の稜を予定

表紙写真

1999年10月26日、ナムナニ登頂を終えて氷河を下降している仲間を迎えるためにジープで丘陵を登ると、突然ラカス湖の彼方にカン・リンポチェ（カイラス）が頭部を傾けるような姿で現われた。南から北へ吹き抜ける強風の通り道の丘陵に私はぼう然として立ずみ聖山にみとれた。

（記：山森欣一）

ヒマラヤ No.341

1．チベット連続登頂登山隊報告（下）カバン峰からナムナニ峰へ連続登山を終えて聖山巡礼へ　ＨＡＪ登山隊

14．第８回 中国登山研究会報告

16．ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・BOOKS・トピックス〉

20．トマジ・フマル－スロヴェニアが生んだ新たなヒーロー

24．寸感・事務局日誌

Simple＆Clean　Expedition for Himalaya

チベット連続登頂登山隊報告（下）

カバン峰からナムナニ峰へ

ＨＡＪ登山隊

連続登山を終えて聖山巡礼へ

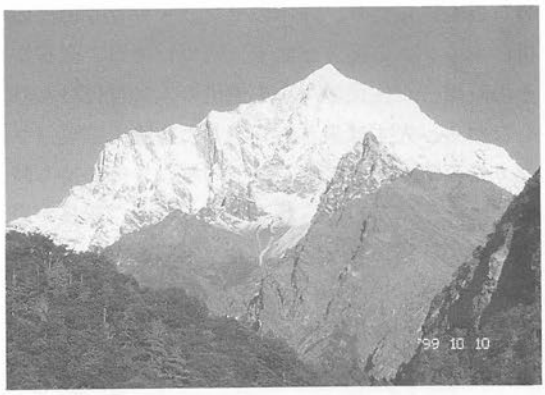
カバンのＢＣからナムナニのＢＣへ

10月９日

今日はＢＣを撤収して棍（グン）から吉隆（ジーロン）鎮への移動日。皮肉な事に天気は登山活動が終わった途端に一変し、今日も雲一つない好天気。しかし気温はかなり低い。

７時に目を覚まし、先ずは個人装備の整理をしてからＢＣ撤収作業。殆どの隊荷の梱包は昨日済んでいるので残ったテントなどを順次片付ける。程なくテント外での朝食をしていると10時と言っていたグンからの民工が未だ９時過ぎなのにやって来て、焚き火を燃やしたり、食事をしたり、はたまた担ぎ易い荷物を奪い合ったりとテントサイトは大賑わい。

10時過ぎから下山開始。２時間足らずでグンに降り着き一服、昨日一足先に下っていたチャンバや登山期間中は一旦拉萨に帰っていたサンペイと久々の再会。ここまでトラックが登って来れないので隊荷は引き続き民工に下の棍打（グンダ）の車道まで運び降ろして貰うとの事だったが、連絡官らと話をしていた民工が突然引き上げてしまい吃驚。聞けば何の事はない昼食に帰ったのだそうで一安心。間もなく戻って来た民工と一緒にグンダへと下る。その最後の下り坂で一足先に帰国する伊東隊員を迎えに来ていた車が登って来て、下って来たチャンバらの車と鉢合わせ。前進するのも大変なのに狭い急坂をバックで下るハプニング。グンダではトラックが吉隆鎮には寄らずに納木那尼のＢＣへ直接向かうので、合流するまでに必要な物を取り出す再梱包をしてから隊荷を積み込む。その合間に、そばの食堂兼雑貨屋で買って来た瓶ビールで喉を潤す。最後にトラックに積んだドラム缶からランクルへの給油が終わるのを待って吉隆鎮へと出発、吉隆蔵布左岸沿いに南下する道は相変わらずの悪路で、尻の落ち着く暇がない。特に吉隆鎮が近くなってからが悪い。しかし周りの風景は殺伐とした禿山ばかりの世界から緑濃い森林、更には開けた田園へと移り、丸で日本の山間を旅しているような趣。何せ4000ｍ近い高所から一気に1000ｍ以上下るのだから。その吉隆鎮には２時間足らずで到着。長閑でこぢんまりした農村だ。これまで見て来たものとは違って全体的にネパール風の佇いの集落で、ここがネパール国境そばと言う事を物語る。特にゴンパなどははっきりそれと分かる建物だ。高度も2800ｍ程に下がり、空気が濃くなったのと緑が豊富なのとで気分が落ち着く。招待所では二階に案内されて二室続きの部屋に全員が入る。19時の夕食まではフリータイム。出掛けた便所近くの空き地に大麻がぼうぼうと生えているのには驚く。



▲未踏のランプー・カンリ（6,668ｍ）南東壁

ネパール国境の山(1)

18時になって連絡官から出掛けるとの声がかかり、食事の場所が変わったのかと全員が車に乗り込んだら連れていかれたのは町外れの人民軍辺境防衛部の事務所。そこでパスポートの提示を求められ、出掛けに隊長から持って行けと言われた事で調べは何事も無く終了。招待所に戻ってから程なく夕食との知らせで、招待所内の食堂へと出向く。ところが食事が中々出来て来ず、その間、缶ビールを何本も飲んで食事までに出来上がってしまう。社交家の野沢井隊員などは隣で食事をしていた二人連れの村の姑娘（クーニャン）の席に座り込み、国際親善に一役買っていた。何日振りかの食堂での食事には満足。食後、部屋で二次会の後、就寝。

10日、晴れ。

今日はいよいよ伊東隊員との別れの日で、馬拉（マ・ラ）越え下った先の分岐で伊東隊員は定日（ティンリー）へ、我々は萨嘎（サガ）へ向かう事になっている。

朝、目を覚ますと外は白みかけていて、丁度、周囲の山々に陽光が当たり始めたところだったので早速揃って写真撮影。陽が山の頂に当たり出す光景は素晴らしいの一言。

招待所での食事を終えて出発。昨日走った道を逆戻りし、途中の見晴らしの良い場所で周りの山々の写真を撮ったり、昨年のヤンラ・カンリ偵察の折にキャンプを張った如卡（ルカ）では、隊長がその時撮った住民の写真を道班の人に言付けたりしながら、先ずは来る時一泊した吉隆＝宗嘎（ゾンカ）の町へと入る。ここでの昼食までの待ち時間に国際電話が掛けられると言うので、隊長が登山結果を連絡、我々隊員数人も家族の声を久々に聞く。食後、馬拉への登り口の町外れで給油。周りには人々が収穫の取り入れに勤しみ、収穫を満載したトラックが時々走り去って行く田園が広がる。馬拉（5234m）では停車して周辺の写真撮影をするが比較的近いシシャパンマやラプチェ・カンは見えるものの、昨年の偵察の時には素晴らしい眺めを披露して呉れたネパール国境付近の山々は靄に霞んで殆ど捉えられず仕舞い。峠を越えて下りに入ると定日と萨嘎の分岐にはアッと言う間に着く。いよいよ伊東隊員との別れの時である。日本から連れ立って出発した者にとっては丁度一月、樟木（ザンム）で合流した者にとっては20日間、一緒に旅をし、生活を共にしてきただけに途中で別れるのは寂しい限りだが、帰国後の再会を約束し、お互いの道中の無事を願い合って東と北への車の人となる。

ここから先はチベット三度目の私にとっては初めてのところだけに、どんな風景を楽しませて呉れるのかとの期待を抱いたが、車は相変わらず4500m台の高原の中を走り続け、周りの山に囲まれた景色は代わり映えしない。やがて峠を越えて湖となった雅魯蔵布江（ヤルツァンポ江）の流れを右手に見ながら走るようになると程なく対岸左岸側の山裾に広がる萨嘎の町が見えて来た。川幅が広いので何処で対岸に渡るのかと思っていると、車は逆に町から離れてかなり上流まで走り、対岸に船が停泊している川岸でストップ、流れを渡るのは橋では無くフェリーだった。チャンバたちが合図のクラクションを頻りに鳴らす。しかし相手はのんびりしたもので暫く建物から出て来ないし、船を出す作業を始めてからも遠く見える7～8人の人影の動きは至ってゆっくり。結局30分以上経ってから動き出したが、これがまた動力船では無くて人力船だったから驚きだ。船は両岸に渡した太いワイヤーと船に取り付けたワイヤーを滑車で繋ぎ、僅かにこちら側が川下になった流れを利用して渡って来る。その間約10分位か。それでは帰りはどうするのかと乗り込めば対岸に待機していたトラジーが動き出し、船がゆっくりと進み出した。船には別のワイヤーが取り付けて有り、それを対

ネパール国境の山(2)

岸のトラジーで引っ張ると言う訳だ。ところがフェリー船は幾らも進まない内に川中でストップ、何とトラジーが引っ張っていたワイヤーが切れたのだ（と言ってもワイヤーは途中でロープと繋いであり、その繋ぎ目が外れたらしい）。はてさてどうするのかと見ていると、女性二人が長い丸太棒で川底を突いて船を少し動かしては元に戻らぬように両岸に渡したワイヤーに繋いだ滑車を移動させ、これを繰り返して徐々に対岸へと近付けて行く。それが彼女たちの役割なのだろうがかなりの重労働だが、平気な顔をしている。それに反して船長らしき男の方は何もしないで眺めているだけ。これだけでもチベッタンは女の方が働き者だというのが頷ける。かくてこの渡し場だけに1時間以上を費やして漸く対岸に辿り着き、そこから僅かで夕暮れ近い萨嘎の招待所へ入る。この招待所は他の町の招待所とは違い、部屋は掃除が行き届いて清潔だし、広い庭にはゴミ一つ落ちていない。管理人が小まめに掃除していて、うっかり煙草の吸い殻も捨てられず、わざわざゴミ捨て場を尋ねに行く気にさせられる。夕食は招待所から5分程の星月酒家で。陽が有る内は暖かいが陽が落ちると一気に気温が下がり食事をしていても寒い。何せ萨嘎の町は標高が4500mも有るのだから無理もない。食後はお決まりの二次会。

11日、晴れ。

夜明け前に起床。未だ人気も疎らな通りを昨夜の星月酒家に出掛けて朝食。食後すぐに次の宿泊地の帕羊（パヤン）に向けて出発。ここからは主要道の拉普公路だけに道幅も広く良く整備されていて乗り心地は良くなるが、夜は明けていても周りを山に囲まれた地形だけに、その間を縫って走る車にも中々陽が当たらず、車内は窓を閉め切っていても寒くて叶わない。最初の峠を越え1時間程走って漸く陽が隈なく当たり出した河原で小休止。流れそばの草地で馬が草を食み、遠く谷間の向こうに白嶺が顔を覗かす。冷布崗日（ルンポ・カンリ）か？。

この後も車の走行は順調で、一つ、二つと峠を越えて昼食時に迎えた頃にチェックポストの有る集落に着く（公路に面して扎西招待所が有るが、これが集落名かどうかは不明）。スタッフが車を止めて暫く動かす様子が無いので昼食かなと思っていると程なく検問を受けて出発、そこから更に1時間程走った仲巴（チョンバ）に着いてからやっと昼食に有り付ける。この町は計画時には宿泊する予定になっていたが、次の日の移動距離の長さを考慮してパヤンまで行く事になった所。延ばされて空腹だった精も手伝って、この町の食堂の料理の美味しかったこと。だから帰路に、この食堂を舞台にとんだハプニングが起こるなどとは夢にも思っても見なかった。

仲巴の町を出ると周りの景色に変化が見られ出す。周りの山並みが遠ざかって平原が更に大きく広がり、そこに生える草の背丈はこれまでよりも高いものに変わる。その反面、所々に大きな砂丘が出て来たりの半砂漠状態で、丁度パミール高原のような様相。ただ公路は突然の如く悪くなり、又しても揺られ揺られの行軍で、80キロ程のパヤンまで3時間近くかかる。パヤンはチベット族の小さな集落で、周囲を土壁で四角に囲んだチベット農家特有の家並みが有るだけで中国風の建物は一つも無いし、商店らしきものは見受けられない。ただ平原の向こうに白く波打つグレート（ネパール）ヒマラヤの眺望は素晴らしく、きっと名だたる山々が名を連ねているのだろう。

そんな何もないような集落だから食事は何処でするのか見当も付かなかったが、案内された所は招待所と他の建物を仕切る壁に付けられた戸の向こう、中庭に面して総ガラス張りの大きな建物の一番奥の、この招待所の食堂だった。内部は当然チベット作りだし、料理を作るのはチベット女性

で、出されたのも勿論チベット料理。ただし美味しさを期待するには少し無理が有る。

食後の二次会を程々に済ませて眠りに就くが、矢張り寒さが厳しいらしく、係の女性が掛け布団を多めに持って来て呉れたので暖かく眠れる。中々可愛くて愛想の良い娘で、鼻の下を延ばしていたかも知れない。

12日、晴れ。起きた時点での気温は－４度。

招待所での朝食を終えて出発準備となるが、寒さの為にトラックのエンジンがかからず、ランクルで牽引しての始動。今日も一日、半砂漠の中の走行が続く。ここは既に雅魯藏布の源流となる馬泉河（タムチョ・カンバブ）の流域である。走る車窓の左手にはヒマラヤ山脈の白嶺のスカイラインが続く。12時頃には5216mの馬攸木拉（マユム・ラ）を越えて普兰県へと入るが、食事をする町が無いとの事で、昼食は３時を過ぎた辺りで道路脇の放牧のチベッタンが休憩などに使うらしい無人の小屋で持参の中国製のカップメンを作って済ます。更に広い平原を突き進む内に納木那尼（ナムナニ）の巨体が遠望され始め、次の峠に出ると山並みの向こうに初めて岡仁波斉（カンリンポチェ）が姿を現す。そして、この峠を下り切った途端、突然の如く左手に納木那尼を従えた大きな湖が眼前に広がる。聖湖・瑪旁雍錯（マパムユムツォ＝マナサロワール湖）だ。隊長は15年前、この湖畔でキャンプしたそうだ。

ここから納木那尼のベースキャンプへの道は右に折れて瑪旁雍錯の北を湖岸に沿って岡仁波斉の方へと向かい、納木那尼からは一旦遠ざかる。すぐの霍尓（ホルチュ）の町に立ち寄り（スタッフが道を確認か）、30分程走って巴嘎（バルガ）の町を通過、その先の辺境防衛部のチェックポストでの検査を済ます。ここで道は二つに分かれ、我々はカシュガルへと続く道を右に見送って南の普兰への道へと入る。町を越え丘を越えて起伏の激しい高原を横切って再び瑪旁雍錯を目にする。この湖畔で小休止の後、すぐ近くの小集落（実は帰路に立ち寄る事になる温泉場で、建物はホテルだったのだが）を経て次の峠を越え下る。すると今度は拉昂錯（ランガクツォ＝ラカスタル湖）の大きな湖面が現れる。この拉昂錯の湖岸に沿って更に暫く南下、日はもう暮れかけている。程なく湖岸を離れて山手へと近づき納木那尼が次第に近づいて来る。やがて峠（グルラ・ラ）を越えて下り切ると砂礫の堆積した平坦地が続き、道が急に悪くなる。広い河原を横切っているようだ。そして程なく立派なコンクリート製の橋を渡った所で公路を左に折れて平原の中へと入る。その平原の先がベースキャンプらしい。ところが広い平原の何処を見渡しても集落らしきものは全く見えないし、第一肝心の水場が有るようには思えず、これではとてもベースにはならない。丁度馬に乗ったチベッタンが通り掛かったのでスタッフが付近の様子を尋ねたようで、隊長の乗った車が平原の奥へと偵察に行く。待つ事一時間以上、遅れていたトラックが到着してからも随分時間が過ぎ、周りが暗くなり始めた頃になって、車影が見えなくなる遠方まで走っていった車が漸く帰って来たと思ったら、そのまま公路に出て逆戻り、我々の車もその後を追う。隊長の車は峠の登り口の手前で右に折れ、今度は右岸側の平原を上流へと入る。確かに轍の跡らしきものは続いてはいるが、途中の砂地の傾斜地では馬力の強いランクルでさえ一度では乗り切れない程の悪路である。程なく流れが右手に見え出すと放牧のチベッタンの住まいとカルカが点在する河岸段丘に出て、その一番奥の流れ側、一昨年アメリカ隊がベースにした所だと言うテント場跡へと到着する。水は段丘下の広い河原を横切って真ん中辺りの流れまで汲みに行かねばならないが、格好のキャンプ地である。

キャンプサイトが決まったら次はトラックから隊荷を降ろしてＢＣ設営。とっぷりと日が暮れ強風の吹き付ける中でヘッドランプをつけてテントを順次張って行くが、寒くて身体が思うように動かない。聞いてはいたが想像以上の寒さで、カバンの時とは大違い。漸く全ての作業が終わったのが10時過ぎ。長い車での移動と寒さの中での作業で疲れ切っているし、作っている時間もないのでアルコールを飲みながら昼間に続いてインスタントラーメンでの食事とする。食後は早々に就寝、明日からの登山活動に備える。（記：樋上嘉秀）

（編注）※ここは古い仲巴でネパール国境に見えるのは、ダモダール・ヒマラヤの連山。

聖山カン・リンポチェの巡礼

26日、快晴。

8時に起床。朝食は成連絡官がスイトンを作って呉れる。10時半に隊長が下山して来る三人のルートサポートと出迎えに対岸の平原へチャンバの車で出掛ける。残った副隊長と成連絡官との三人は特別にはする事もなく。午前中は食器洗いやガス缶潰し、川への水汲みなどで時間を過ごし、午後からは個装の梱包を済ます。夕方近くなって副隊長が今日の祝宴の料理作り。ところが途中で隊長との交信が途絶えてしまうアクシデントが発生、ＢＣと下山して来る岩崎隊員とはコンタクトが取れるのだが、どちらからの呼び掛けにも隊長からの応答が無い。このままでは車の待っている場所が掴めず、下山組は隊長と出会えずにＢＣまで徒歩で帰る事になる恐れもある。こちらも丘の上の方へ登ったりして副隊長が必死に交信を試みるが一向に通じない。時間は刻々と過ぎ、陽が落ちて暗くなって来るし気温も急激に下がって下山組の疲労が気になってヤキモキ。しかしそれは一時の危惧だったようで、程なく出会えたとの岩崎隊員からの無線が入り、一件落着。後で聞くと無線の電池切れだったとの事。待つ事暫し、21時を少し廻ってＢＣへ向かって来るヘッドライトが目に入り、ランクルが帰って来た。降りて来た岩崎、野沢井、古谷の三人と感激の再会、夫々に抱きついて無事と登頂を喜ぶが涙が出て止まらない。

三人が装備を解くのを待って21時半から祝いの酒宴を始める。全員が本当に嬉しそうで、三人の登頂に纏わる話にテントの中は外の寒さを吹き飛ばす暖かさ。しかし我々残留組に比べて酒も食事ももう一つ進まない。流石に相当疲れているようだ。それでもその夜は午前２時まで酒宴は続き、我々年寄り組は少々飲み過ぎたようである。

27日、今日も一日雲一つない快晴。

昨夜の遅くまでの祝宴と、休養日という事もあって10時過ぎまでシュラフに潜り続ける。食事との声にテントを出ると隊長は既にゴミの焼却作業中。それがＢＣでの殆ど毎日の日課であった様子。聞けば隊長も副隊長も私同様少し頭が痛いとの事。矢張り昨晩の深酒が年に障ったようだ。朝食は又々成連絡官の作って呉れたスイトン。

▼マナサロワールの温泉

食後、納木那尼メンバーが個装の整理を始めるが、疲れと足の凍傷の影響でか三人とも動きが緩慢。特に凍傷の酷い古谷隊員は見ていても痛々しく、暇を見つけてマイシンや胃腸の内服液とゲンタマイシンなどの外用薬を渡し、手当ての仕方を伝える。午後からは食糧関係などの梱包を手伝ったりもするが、副隊長共々特別する事もなく、退屈な一日。途中全員で缶ビールを味わい少し頭痛が始まる。運転手のチャンバは午後から普兰（プラン）で待機しているサンペイとトラックの運転手を迎えに行き、今日はそのまま普兰泊まりらしい。

作業が終わった４時頃に全員がメステントに集まり、暇潰しにと飲み始めたら、それが途中で成連絡官の作って呉れたカレーライスの夕食を挟んで24時近くまで続く。話は昨夜に続いて納木那尼登頂に纏わるエピソード。テントの中は常に笑いの渦に包まれるが、これも三人が登頂して無事に帰還して呉れたからで、嬉しさが何度も何度も胸の奥から込み上げて来る。古納拉（グナラ）の初登頂も中国登山協会から認めて貰えそうと言うのも嬉しい知らせ。

24時に自分のテントに帰って就寝、シュラフはファスナーの取れている部分を縫いつけたし、心は楽しい話を一杯詰め込み、外からも中からも冷たい隙間風が入らず、暖かい夜を過ごす。

28日、今日も晴天が続くが、朝方は少し冷え込んで寒い。

９時に起き、10時から朝食。今朝も成連絡官のスイトンである。食後、ＢＣ撤収作業。これに呼応するかのように放牧に来ていたチベッタンたち

▼タンボチェとカイラス

も全員が、この地を後にするようで、トラックにヤギの糞を積み込んだり荷物を運ぶ準備を始めている。最初の梱包作業は夫々の役割に沿って進められ、特別な役割の無い私などは手持ち無沙汰で仕方ない。程なくチャンバがサンペイとトラック運転手を連れて帰って来て、メンバーが全員揃う。昼食は昨日の約束通り岩崎隊員がソーメンを作って呉れたので美味しく食べる。テントなど最後の撤収を終え、荷をトラックへ積み込んで14時50分に17日間世話になったＢＣ地を後に普兰へと向かう。

暫くはこれまでと変わらぬ山岳風景。その内に集落が点々と見えて来た長閑な田園風景が続き出し、これまでの半砂漠の高原地帯の風景とは一転して丸で別世界へ来たよう。家々の回りには木も結構植わっている。

普兰の町には一時間もかからずに到着、普兰賓館へと入る。部屋は二間続きで隊長以下隊員全員が同室。ここらも国際電話が出来ると言うので近くの電話場へと早速出掛け、夫々が家族に登山結果を知らせる。家族に特別変わった事が無いのが分かり一安心。

食事までの時間を利用し、全員で17時少し前に町の散策に出る。長閑な田畑の中の道を横切り、カルナリ河（マプチャ・カンバブ）の流れを橋で渡って対岸の高台の集落へと登り返し、そこから今度は支流を渡って対岸の高台に有るネパール人のバザールへと登り返す。カンリンポチェ巡礼のシーズンだと賑わいを見せるのだろうが、何せ今はオフシーズンで開いている店は少なく、人出も殆どなく閑散としている。ここから更に上部には廃墟となったゴンパが有るが敬遠、カルナリ河の右岸の方へと下る。下り切って道が平坦になると両側に民家や店が建ち並び、人の行き交かいが激しくなる。程なくカルナリ河に架かる橋を渡ると、対岸は一寸した商店街で、店波は坂を登り、車で通った公路近くまで続き、多くの人で混雑している。我々も掘り出し物は無いかと何軒かの店を覗きながら公路へと出る。後は公路をホテルまで帰る。この間丁度２時間、観光客のネパール人に話しかけられたり、土産物を買ったり、持って来た貝殻との物々交換を断られたり、渡渉で足を濡らしたりと愉快な散策ではあったが、町をぐるりと一周するコースはアップダウンが激しく、結構疲れた。食事までの１時間は帰路に副隊長が買った葡萄を食べながらウィスキーをチビリ。

20時からの夕食は近くの四川料理店。久々の本格的な料理に舌鼓。ホテルに帰ってからは恒例の二次会。シシャパンマ方面が大雪に見舞われているとか、途中で別れる岩崎隊員を送る為に、トラックに隊員の誰かに乗って貰う計画が駄目になったりと話題も色々。

29日、快晴。

８時の起床。今日の出発は宿泊地の大金（タルチェン）までは100キロ程なので午後から。９時の朝食に昨夜の店に出掛けると未だ準備も出来ていない状態で、食事が出来るまでの間、朝からビール。10時になって出て来た料理は包子（パオズ）と米粥（ミィチョウ）。米粥は兎も角として包子が好きなのは私だけでは無く、みんなで幾つ食べた事だろう。ホテルに帰って昼食までの時間をのんびりと過ごす。

昼食は出発の都合でか何時もより早い12時から。11時に朝食が終わったばかりなのに食べれるのかと自分の腹を疑いながら朝の食堂へ。ところが食事の準備が又も出来ておらず、ビールを飲むのも１時間待たされるのも朝と同じパターン。違ったのは傍の店で買って来た皮蛋（ピータン）を食べたのと出て来た料理が焼き饂飩のような麺だった事。それにしても良く入る。

そんな事で賓館を14時に出発、雄大な納木那尼のスロープを見ながら昨日の道を逆戻りに走る。２時間で瑪旁雍錯近くの温泉場に到着。そばには

拉昂錯と瑪旁雍錯を繋ぐ干迦河（ガンガ・チュ）が流れ、近くの丘の上にはゴンパ（チゥ・ゴンパ）が建つ風光明媚な所で、温泉はゴンパの管理だと言う。この温泉で久々の湯に浸かり、砂埃と身体の汚れを洗い落とす。この後、瑪旁雍錯の岸辺に立ち寄り、記念に聖なる水を汲み湖岸の石を拾ってからタルチェンへと向かう。広い平原（プンドクタン）に出て、新蔵公路を真正面からの夕陽を受けながら北東へと移動、程なく公路を離れて山裾近くにこぢんまりとした佇いを見せるタルチェンへ19時に着く。

宿舎は町入口の平原に面した広い庭の有るホテル。シーズンオフなので、宿泊客の姿も見られない。それにこのホテルでは食事は出来ないし、町にも我々の利用出来る食堂は無いとの事。それはタルチェンに着く前から予測済みの事なので、早速トラックからプロパンガスやコンロ台などの炊事用具を食事場にと与えられた物置小屋のような部屋に運び込み、岩崎隊員たちにカレーを作って貰ってアルコールを飲みながら夕食とする。就寝は23時。

30日、今日も雲一つ無い快晴が一日続く。

9時の起床。昨晩の残りを暖め直したカレーで朝食。その後、ヤク二頭に担がす荷物の梱包。途中で一泊する為の幕営用具や炊事用具を運ばすのだが、ヤクは一頭で良いのに二頭でないと駄目だと言われ、二日の日程なのに料金も三日分を要求された。お陰でプロパンボンベやペフマットを持って行けるのは有り難い。10時に約束通りヤク工が二頭のヤクとやって来たが何とも無愛想な人物で、これまで知った人懐っこいチベッタンとは少し違う。その御仁が荷物をヤクに担がせ終るのを待ち、隊長以下隊員全員とチャンバの計7名で成連絡官、サンペイらに見送られてカイラス巡りの旅へと出発する。先に行くヤクを追ってホテルの正面門を出て右に折れ、草原を山裾の方へ斜めに横切って行くと集落から来ている巡礼道に出る。広くて良く踏まれた立派な道である。この時間山裾には未だ陽が当たらず結構寒い、足を痛めている古谷隊員は靴を履くと痛いからと草履で出発したものの巡礼道に出る手前で立ち止まってしまい、暫く歩き出さないのが気懸かり。道が少し登りにかかる頃になって陽が当たり出したと思ったら先行していたヤクが一休みし、ヤク工はと見れば道端の草地で気持ち良さそうに高鼾。全く意を得ない人物である。11時30分、石を山積みして建てたポールに巻きつけられた沢山のタルチョがなびく小高い丘へと登り着く。チャツァルガンと呼ばれる所で付近には古びた服や履物も散乱している。巡礼者が置いて行くのだそうだ。ここで最初の小休止。程なく遅れていた古谷隊員も追い着く。矢張り草履では歩き難くて靴に履き変え、痛みは取れないが何とか歩けそうだとの事で一安心。隊長は巡礼者に倣ってタルチョを廻る踏跡を辿って五体投地で一巡り。ここからはカンリンポチェの西面を流れて拉昂錯（ラカスタル湖）に入る納曲の広い谷間に下って広い河原沿いに上流へと向かう。小1時間で遠くからでも高いポールが立っているのが分かるタンボチェに着く。ここは年に一度のサカダワ祭（6月に釈迦牟尼の誕生日）の行われる場所である。全員がこのポールの周りを右回りで一周し、夫々の願いを祈る。

この先で流れを渡って、広い河原の右岸、切れ立った斜面中腹に宇次貢巴（チュク・ゴンパ）を見ると、それから程なくで谷は急に狭まり、道はその間にアップダウンを繰り返しながら続いている。我々は左岸沿いに進んで行くが、右岸を行く巡礼者のグループも何組か見られ、正道はそちらとの事。やがて狭い谷間が終わって再び広い河原状の中を進む。両岸にはロッククライミングのゲレンデに持って来いの岩壁が広がる。

16時半、タムディン・ドンカンと呼ばれる小広い祈りの場に着き、巡礼者たちが一息付いているので疲れた我々も小休止。ここで思い掛けなくチャンバからナンと羊肉の差し入れを受け、朝食以来殆ど満たされていない胃を喜ばす。

この先で流れは三つに分かれ、巡礼道は一番右の流れ沿いに続く。しかし三又からは後少しと聞いていたテント場には中々着かず、いい加減うんざりしてしまう。やがて対岸に哲惹布貢巴（ディラ・ブク・ゴンパ）とその下の宿泊所が見え、チベッタン巡礼者が流れを渡ったり、草地で野営する支度に掛かっている。この辺りからは岡仁波斉の北面が鮮やか。

▼最高所ドルマ・ラ（大岩が見えない）

ここで遅れているメンバーを待ちながら一息入れていると追い付いたヤク工が先に立ち、少し先のテント場へと案内して呉れた。そこは流れを離れて右手の山側に入った支流のドルマラ・チュに近い平坦地で時間は17時半、高度は約5100mであった。

早速ヤクから荷物を降ろし、幕場設営。日が暮れると一気に気温が下がり、食事の出来るまでウィスキーで暖を取る。夕食はシチュー、これがまた美味い。

今日一日の長い巡礼行には流石に疲れ、就寝は早目の21時。ヤク工はテントそばで野営である。

31日、晴れ。

7時にシュラフを抜け出す。夜は未だ明けておらず薄暗い。岩崎、野沢井両隊員が先に起きて作って呉れたスイトンで朝食。食後すぐに撤収作業にかかり、持ち帰って貰う荷物をヤク工に託す。ここからヤク工にはタルチェンに引き返して貰う事になっていて、隊長がその念押しをチャンバに頼む。

幕地を9時に出発、ドルマラ・チュを丸木橋で右岸に渡って坂道を登り出す。それ程の傾斜では無いが、これまでの道程では一番の登り坂で息が切れる。1時間程でチャツァルガンと同じように沢山のタルチョが張られ、衣類や履物が捨てられた場所に出る。ここも巡礼者の祈りの場所なのであろう。ここから僅かで坂道は終わり暫くは谷を右下に見ながらの水平道。途中のカルカが幾つか見られる地点になって漸く陽が当たり出したので一服。ところが帰ったと思っていたヤクが姿を現し吃驚。休みを終えて先を進み出したチャンバを呼び止めて尋ねて見ると、それで良いのだと言う仕草。どうやらチベッタンのヤク工にして見れば左回りで大金に帰るなどはラマ教の教えに反する事になり、初めから一緒に一周するつもりだったのであろう。

休みを終えて歩みを再開、程なく谷が二つに分岐する地点から右に入る谷に沿っての巡礼道は卓瑪拉（ドルマ・ラ）に向かっての急坂で、巡礼路最大の難所でも有る。喘登する事30分、傾斜が落ちて夥しい岩屑の堆積帯を縫い進んで峠へと立つ。高度は5600m、巡礼路の中で最も高い地点である。辺り一面には足の踏み場もない程に無数のタルチョが結び付けられ、ここが巡礼者にとって一番大切な祈りの場である事を物語る。野沢井隊員もカバンとナムナニのベースに飾っていたタルチョを奉納する。全員が揃うのを待って記念写真。しかし風強くじっとしていると寒くて堪らず、程々にして先を急ぐ。

ここから先は一気の下り坂。峠の真下にはゴーリクンドの青い湖面が広がるが、それをゆっくり見て楽しむ余裕など全く無く、チベッタン巡礼者の一団と後になったり先になったりしながら駆け下る。彼らの足は早いが、休みを頻繁に取るし、その時間も長いからだ。

この坂を下り切って流れ出ると後は広い河原に沿っての単調な道が長々と続き、疲れは酷くなるばかり。途中の休憩時での、仁珠屯貢巴（ズトゥブクゴンパ）が次の谷との出合いを過ぎてすぐかどうかとの賭で、すぐを選んだのも疲れから早く着いて欲しいとの思いが強かったからであろうか。その願いも空しくゴンパ下のゲストハウスに辿り着いた時には16時になっていた。ビールや食べる物でも無いかと覗いて見たが、シーズンオフで営業しておらず、これも期待を裏切られてと疲れを一層増幅さす。ここからも流れ沿いの道は更に続く。そして谷が狭くなると今度はきついアップダウンの連続で疲れは益々酷くなる。やっとの思いで谷間を抜け切ると広い平原が眼前に広がり、右に折れた道は山裾に沿って続いて行く。いよいよタルチョンへ向かって最後の歩みに入った訳だが、やがて見えて来たタルチェンの町までは遠く、沈み行く夕陽を正面から受け、滲み出る汗を拭き拭

きの辛い行軍を強いられ、まさに日が暮れかけた19時に漸く成連絡官の出迎えを受けてホテルへと帰り着いて、二日間のカンリンポチェ巡礼の旅を終えた。

ホテルには一人泊まり日本人の若者がいて、巡礼の途中で日本人グループに会わなかったかと尋ねられるが、日本人で会ったのは若いアベックだけだからその旨を伝えると女性はいないとの事。ところが後で帰って来たアベックの男性の方が捜していた友人で女性とは巡礼の途中で知り合ったとの事。道理で分からない筈だが、他のメンバーはどうしたのだろうか？。ホテルに帰ったらゴンパの件での賭けに負けた者はビールを奢る約束だったので、成連絡官に頼んで町からビールを買って来て貰う。全員の帰着後の21時、そのビールを飲みながらシチューで夕食を済ませ、23時に眠りに就く。夕方の若者たちに前の部屋を取られ、新しい部屋が遠くに移った岩崎、野沢井隊員は部屋に行くのが面倒と調理小屋で眠り、古谷隊員は我々の部屋の床にペフマットを敷いて眠る。

（記：樋上嘉秀）

カイラスから拉萨への帰り旅

11月１日、晴れ。但し雲多く気温は－10度。

７時半の起床。古谷隊員が調理小屋で一夜を明かした岩崎、野沢井両隊員が朝食を作っているのを手伝いに部屋を飛び出す。スイトンで朝食の後、撤収作業。

トラックへの積み込みを終えた９時20分、昨夜同宿して知り合った日本人３人の見送りを受けてホテルを後にする。今日はカバンのＢＣを撤収して以来初めて雲の多い日で、岡仁波斉は見えないし、納木那尼も頭を覗かせているだけだ。今日の宿泊地のチョンバまで悪路が続くだけに砂塵を撒きあげての走行は時間が掛かる。時折、草原を駆けるロバや鹿の群れが見られ、景色の殺風景さを補って呉れる。来る時同様、途中に食事する町が無いのでマユム・ラを越えて程なくのタムチョ・カンバブの河原でインスタントラーメンを作り、14時半から１時間かけて瓶ビール付きの昼食。

ここから３時間掛かってパヤンの町を通過、チョンバまでは更にもう３時間掛かる地点だ。やがて日が暮れ始め、空に星が一つ、また一つと輝き出すのを数えながら退屈を凌ぐ。

チョンバには予想に近い21時10分の着、辺りはすっかり真っ暗だ。時間が遅くなったので先に宿舎に入らず、行きに使った食堂での食事。空腹だっただけに食事の美味しかった事。食事を終えて満足した胃袋を摩りながら23時半に食堂とは道を挟んで迎え側のホテルへと入る。案内された部屋は全員が一緒に泊まれる広い間。ベッドも決まり、さて荷物を片付けようとして初めて中にパスポートと現金の殆どが入った腰のポシェットの無いのに気が付き、食堂に忘れたと急いで引き返す。しかし食堂の女主もマージャンをしていた人民軍の兵士たちも知らないと言い張る。ホテルに帰って隊長に相談の上、成連絡官と一緒に食堂へ戻っても同じ返事しか戻って来ない。それでは公安へ行けとの隊長の指示で、成連絡官と夜中の町を公安へ出向く。時間は既に24時を回り、着いた公安は既に眠りの世界だったが、起きて来た係官が話を聞いて上司を、更にはその上の上司を呼んで呉れ、三人の公安官と食堂へと向かうが、結局事は進展せず。こうなれば知らぬ異国での紛失だけに徹底的な調査の期待も出来ず、やむなく現金の戻るのは諦めざるを得ない。幸い手元には幾らかの元が残っていたので、当面移動にも必要なパスポートの紛失証明を明朝書いて貰う事で公安官とは話が着く。

ところがそれから１時間程過ぎた１時半になってポシェットがゴミ捨て場に落ちているのを公安官の一人が見つけたと言って届けに来た。中を見ろと言うので調べるとパスポートとドル札、それにナイフなどの持ち物は全て入っている。しかし日本円札は一枚も無い。それでもパスポートが見つかった事で、後の煩わしい手続きや、余分な時間を割かれて他のメンバーに多大な迷惑を掛ける事を思えば有り難いし、現金は全てを諦めていたのに五万円程のドルだけでも出て来たのだから大助かりで、日本円が出て来ないからなど贅沢を言える立場ではない。それでその旨を公安官に伝え、感謝の意を表して一件落着として貰ったので、公安官もその場を引き上げて行った。

しかし話はそれで終わらなかった。時間は３時を回っていただろう。パスポートと現金の一部が

▼疾走するチベット・ノロバ

戻って来た事で、それまでの緊張から解き放されてすっかり眠り込んでいた私は隣のベッドの副隊長から揺り起こされる。ベッドに身を起こした私の顔に眩しい懐中電灯の光が当たり、剥き出しの拳銃を腰から紐で吊した公安官がベッド脇に立っている。そして私と目が合うなりベッドの上に何やら投げ落とす。見れば一万円札の束である。数えろと言うので調べると、記憶違いかも知れないが少し足りない。しかしまだ出て来るだろうとの淡い期待が無かった訳ではないが、それだけ戻ってくるとは考えられなかったので有り難い。ただ何処に有ったとか誰かが盗んでいたとかの説明は最後まで無かったのが腑に落ちない。多分、最初にポシェットを届けた後で色々な動きが有り、わざわざ拳銃をぶら下げて来た事から見ると、暗に十分に調べたから、それ以上の事は言うなとの威嚇の意が込められていたようにも思える。こちらとしても殆どの現金が返って来たのだから足りない分は礼金として差し上げても足りない程の額だから全く異存の無いところで、それで良いかとの公安官の質問に同意して長い長い一日を終えた。

２日、天気が回復し、午前中は再び雲一つ無い晴天。

払暁近くなっての紛失騒動の思わぬ決着の興奮で熟睡出来ぬままに７時の起床。隊長初め隊員の皆に迷惑を掛けた詫びをする。朝食は昨晩の店での予定だったが縁起が悪いとキャンセルし、途中の町で取る事になる。

９時にホテルを車で出発し、先ずは公安局へと向かう。途中、ホテルへ出向いて来る西落公安官殿に出会い一緒に公安局へ。公安局では西さん、隊長から感謝状や隊からの贈り物を受け取り、私に戻されたポシェットや現金を室内では写らないからと戸外に出てカメラに収めて手続き完了、笑顔と握手で我々の出発するのを戸口まで出て来て見送って呉れ、終始ご機嫌の様子であった。

町を出て、公路を走り出してから小一時間でチェックポストの有る集落へと到着。ここは往路、萨嘎からパヤンに向かう時に立ち寄った所で、丁度昼時だったので食事にして欲しかったのにチョンバまでお預けとなった経緯がある。

さてここで朝食というわけだが、食堂はチベッタン料理の店しかなく、成る程それで行きに食事をしなかったのかと合点する。ここでの食事はトゥクパと呼ばれるチベット風うどん。余り美味しいとは言えないが出された丼一杯の量では若い隊員の空腹を満たせる筈もなく、手を煩わせるのも気の毒だろうと自分たちで二杯目を盛って食べていた。するとそれを見つけた女将が怒り出したのだ。一杯幾らの料金なのに黙って二杯食べたとの事らしいが、別に護魔化した訳では無いし、余計に食べて貰えれば有り難い筈だから、もっと穏やかに言えば良いのにと、その商売っ気の無さに苦笑い。

この町を出てからの道はぐっと良くなり、100キロ程先の往路で一泊した萨嘎（サガ）には13時半に到着。ここではその時に利用した星月酒家で昼食を取って、15時少し前に出発。ここからは吉隆から来た時の道に戻らず、引き続き仲巴から来た雅魯藏布江左岸側の219号線を走る。今日の宿泊地の桑桑（サンサン）までは約150キロとの事だが、主要道だから整備も良く走り易い道のようだ。小1時間走ると道は4800ｍ位の高原の中に続き、周囲の山々は雪化粧しているし、道の山側斜面にも浅い冠雪が見られ、時には道路が凍結している場所さえ有る。多分、過日のシシャパンマ付近の大雪の影響だろう。それに昼を過ぎてからは雲が出て来て、どんよりとした陰気な天気に変わる。やがて峠（切拉＝ツェ・ラ）を越えると眼下に平原が現れ、下る程にその広がりが大きくなって大きな町の存在を予感させる。ところが峠から10キロ程走り、道端に１キロ毎に立てられた道程標では既に150キロを過ぎてしまったのに桑桑に着く気配は一向にない。それから更に走る事30キ

ロ、漸く町に着いた時には陽が山向こうへと沈みかけ始めていた。車は町並み通り過ぎて町出る手前の食堂前で停車、連絡官たちが町の住人に何やら聞いているので宿泊所の事でも尋ねているのかと思う。ところがスタッフたちは何と更に拉孜（ラツェ）まで行きたいらしく、ここからの距離を尋ねていたのである。それが未だ100キロもあると言うのだから早くても未だ2時間以上はかかる。それでは夜中前になってしまうし、何も無理して急ぐ旅では無く、とてもそれには応じられないとの隊長の意見で彼らに納得して貰い、近くの桑桑招待所に宿泊する事で落ち着きヤレヤレだ。

部屋が決まり、中に入って見るとストーブが有り、程なくやって来た部屋係の若いチベッタンの女の子が火を入れて呉れる。燃料はヤクの糞で、ストーブの周りに結構置いて有るから夜は暖かく眠れそう。夕食は8時半からで、それまで部屋で一杯飲みながら過ごす。時間になって招待所近くの食堂へ。町にはチベッタン食堂しか無いと思っていたのに四川料理の店で、料理もチベット料理と違って種類も多く味も良い。

食後は部屋で24時まで酒宴。眠りに就いてからは松舘副隊長がストーブの火を燃やし続けて呉れたお陰で暖かい一夜を過ごせる。夜半に用足しに中庭に出たら空には満天の星が輝き素晴らしいの一言。

3日、快晴。8時の起床。気温は起きた時点でマイナス8度とか。

9時から昨夕の店で朝食を済ませ、9時半に招待所を出発して日喀則（シガツェ）へと向かう。ところが町を出てすぐにチャンバの車が横切る流れで出来た泥濘に嵌り込んで動けなくなる。我々を乗せたサンペイの車が救援を求めて招待所に引き返すが何とこちらでも我が隊のトラックが別のトラックに側面衝突されるアクシデント。被害が軽微だったので車は簡単に決着、すぐさま現場に走り、チャンバの車を牽引して助け出す。その後昂仁（ンガムリン）までは順調で、60キロの行程を1時間半程で走る。ところがその先からが大変で、昨年の大雨で川沿いの正規の道が被害を受けて多箇所で工事中の為、仮設された河原の中の悪路を延々と走る羽目になり、揺れは酷いしスピードは出ないで遅々として進まず、今度は50キロ足らずの行程に2時間半もかかって漸くチェックポストが有り中尼公路（318号線）との合流点の査務（この手前でヤルツァンポーの流れを新しい橋で渡るが、以前はフェリーで渡っていたとの事）へと到着、昨日桑桑で一泊せずに拉孜まで走っていたら真夜中になっていたところで、その事を中国側スタッフは事前にチェックしていなかったようだ。

中尼公路に出ると道はすぐに舗装路になり、10分もかからずに拉孜の町中へと入る。ここでは行きと同じ食堂で昼食、ここの女将は前回同様愛想が良い。町には公路に面して昨年は無かった外壁がタイル張りの中国風の真新しい食堂や商店が沢山出来た為に、この店のように古くから有る店は客を取られがちだから取り返すのに必死なのだろう。

食後はいよいよ一人ネパールを抜けて帰る岩崎隊員との別れである。当初はサンペイの車がザンムまで送って行き、チャンバの車に乗れない隊員の誰かが隊荷を積んだトラックに乗る手筈だったが、トラックに隊員は乗せられないとの指示が有ったらしく、岩崎隊員は仕方なくヒッチハイクでザンムまで行く事になった。その車を探すについてはチャンバは気軽に任せておけと言っていたので安心していたら、一寸動きを見せただけでやめてしまい、後は俺には関係ないと言った感じで知らん顔。結局岩崎隊員が自分で車を捉えざるを得なくなり、それが何時になるか分からないのでは我々も待っている訳にも行かず（帰国後の岩崎隊員の話では、結局その日は車が拾えず一泊、翌日に早朝になってトラックにヒッチ出来てザンムへ行けたとの事）、岩崎隊員を路上に残して出発すると言う寂しい別れになってしまった。

ここから日喀則（シガツェ）までの公路は良く整備されているので走り易く、中間地点の吉定で検問を受けたり、チャンバの車に一寸したトラブルが有ったものの約160キロを3時間でつっ走り、夕闇迫る19時に辿り着く。ホテルは整備の整った日喀則賓館となり、久し振りのバスタブに浸れて気持ち良い。20時半からの夕食をホテル前の食堂で済ませ、1時過ぎまで隊長室で談笑。夜は柔ら

▼サンサンの招待所

かいベッドと部屋の暖かさに却って寝苦しく熟睡出来ず。

4日、快晴。

ここから拉萨までは中尼公路なら一日行程。しかし日程に一日余裕が出来たので、ここや拉萨に一日余分に泊まるのは退屈だし、同じ道を帰るのも変化が無く、それなら遠回りだが今日は途中の江孜（ギャンツェ）で一泊し、翌日ニンチンカンサを見て帰る事になる。その江孜、浪卡子（ナンカルツェ）へと向かう道は逆方向からだが、2年前のクーラ・カンリ遠征の帰りにニンチンカンサを見る為わざわざ遠回りして通ったところ。

8時前に起床し、9時から昨夜の店で朝食を済ます。ギャンツェまでは90キロ足らずなので半日有れば十分だから午前中は扎什倫布（タシルンポ）寺の見学。10時にホテルを引き払い、荷物を車に積み込んで見学に向かう予定だったが、約束の時間にサンペイが現れない。昨日、シガツェに着いた時のはしゃぎ様から見ても旅が終わりに近づいて気の緩みが出始めているようだ。仕方なくチャンバに往復して貰ってタシルンポ寺へ。オフシーズンなので二年前に訪れた時のような人出は無く、境内は閑散としている。私は二度目なので寺院内の見学は半分で済ます。一つ、寺の中庭で奉納された使い古しの衣類や仏具を僧侶が参拝者にバザー方式で売っていたのが印象的。興味を引く物も有り、隊員の誰かも買っていたようである。見学は12時過ぎに終了、チャンバの車が修理中とかで、寺からホテル近くまで30分程かけて歩いて戻る。13時になってホテル前の食堂で昼食。珍しくギョウザが出て来て鱈腹平らげる。

14時にシガツェの町を出発、ギャンツェには約2時間で着く。ギャンツェまでの道中、両側に木が並木状に植えられ道筋には集落が切れ目なく続き、その向こうに田畑が大きく広がる。丁度収穫時を迎え、大勢のチベッタンたちが長閑に農作業に励む姿が印象的で、これまでの殺伐とした風景とは全く違った趣を呈していた。

投宿先の江孜飯店には16時半にチェックイン。ここはギャンツェ一の高級ホテルだそうだ。食事までの時間を利用して全員で白居寺（パンコル・チューデ）の見学に出る。ギャンツェはチベット第三の都市ではあるが規模は小さく、町の北西端にある寺までは歩いて行く。ホテル前の通りを北に向かってロータリーに出て、右手の小高い丘の上のギャンツェ城を見ながら左に折れると、そこから通りの両側に土産物店や一般の商店が立ち並ぶ。白居寺の門前通りで、寺はこの通りの突き当たり。その門前通りを店を覗いては冷やかしたり一寸した買い物をしながらのんびりと歩むが、オフシーズンで観光客や参拝客が少なく、時間も遅い精か店は寺に近づくにつれて閉まっている。寺に着くと正門前には橋が架かり、その両側にマニ車の行列が並んでいるので、これを廻しながら寺へ入ろうとしたら傍にいたチベッタンから何やら声が掛かる。橋の左側を歩いていたメンバーがマニ車を左回りに廻したからで、ラマ教では全てが右回りでなければならないのだ。それではと改めて右に廻しながら門を潜って境内へと入る。ところが既に閉館時間を過ぎていて、丁度奥から出て来た日本人の若者グループは拝観料を払ったのに入れて貰えず、明日まで延ばされたとの事。仕方なく寺の見学を諦め、来た時と同じような調子でホテルへと引き返す。

ホテルには19時過ぎに帰着、食事までの時間を利用してバスに入る。20時からの夕食を町に出て済ませ、ホテルに戻ってからは隊長室で24時前まで二次会。高度は4000m少しで昨日のシガツェと大した違いはないのに夜になると気温が急激に下がり、食事の間も随分と寒かったし、ホテルの部屋も余り暖かくはなかった。

5日、今日も一日晴れ。

8時に起床し、昨夜の店での9時からの朝食を

急いで済ませ、ギャンツェを9時半に後にする。前を走る車の撒き上げる砂塵を受けながら走る事しばし、突然車を止めて通り掛かった人に何やら聞いていたサンペイが車をUターンさせてギャンツェの方へ戻る。どうやら道を間違えたようで、町の近くまで戻ると案の定チャンバの車が待っていて、往復30分程のロスで拉萨への道へ。しかし事はそれだけでは終わらない。30分程走って山手に差し掛かったところにチェックポストが有り、その先が大きなロックフィルダムの建設現場になっていて、ここで今度はチャンバの車が道を間違えて、慌てて引き返すハプニング。ここでも中国側スタッフが事前にチェックなどしていない事が露呈する。

このダム建設の影響での悪路を通り過ぎると、後は整備された道となり、快適な走行が続く。所々に点在する長閑なチベッタン集落をやり過ごす内にニンチンカンサの巨体が次第に近づき、峠への登りが始まる。ニンチンカンサはすぐ傍で、ベースキャンプは登り口の左手に広がる大きな草原の中である。やがて峠の少し手前で支稜からの懸垂氷河が道路脇に落ちる。季節の違いからかクーラ・カンリの帰路に見た時とは随分後退していて迫力感が無い。

峠を越えた地点からは浪卡子県で、坂を下って平原に出ると程なく洛扎県から来る道が右から出合い、クーラ・カンリ遠征が懐かしい。ここから暫くで羊卓雍錯（ヤムドクユムツォ＝ヤムドク湖）が右手に見えて来て浪卡子（ナンカルツェ）の町に着く。この町も随分様変わりして、近代的な建物が増え、町が大きくなっている。この先は干巴拉（カンパ・ラ）への登り口まで羊卓雍錯の美しい湖面を見ながら、その湖岸に沿って走る風光明媚なところ。途中からはクーラ・カンリが湖面の向こうに顔を出す。1時間程で峠へと登り出し、カンパ・ラ（4750m）へは思いの外早く着く。ここは眼下に広がる羊卓雍錯の向こうに白嶺の連なりを従えて一際高く聳え立つニンチンカンサを遠望するには最高のロケーション。暫くの間、全員が写真撮影に熱中する。それが終わって、いよいよ峠からの下り。ここからの下りは登りに比べて随分と長い。

峠からの長い九十九折りの下りが終わって雅魯藏布江の右岸沿いに出ると、そこからは立派な舗装道路に変わり拉萨まで続く。暫くで直進する空港への道を右に見送り、雅魯藏布江に架かる橋を渡った先の中尼公路を右折すると程なく曲水の町に着く。ここで漸く昼食となるが、時間は既に15時前で、全員すっかり空腹状態だったので、料理の出来て来るのが待ち遠しいこと。16時過ぎに曲水を出発し、1時間程で拉萨市内へ。野沢井隊員らには初めての訪問との事だが、思っていた程の大都市でないのが第一印象の様。常宿のヒマラヤ賓館には17時半着。20時からの食事までは自由時間で、荷物整理とシャワーで汗を流す。その序でに留守宅に国際電話。何時の間にかロビーの公衆電話からの直接コールになっていたが、これがテレホンカード式になっていてフロントで50元のカードを買わされる。

20時からの夕食は9月に拉萨入りした時に利用した市内の食堂。この分だと拉萨滞在中は同じ店での食事になり、偶には他の店でとの思いは叶えられそうになさそう。21時過ぎにホテルに帰還。隊長室での二次会に台湾の著名な登山家の高銘和氏が来室、隊長とヒマラヤ談義に花を咲かす。24時の就寝。　（記：樋上嘉秀）

※ナムナニ登山＆カイラス巡礼

1．期間：1999年10月10日～11月10日）

2．隊の構成：山森欣一（隊長、55歳）
松舘正義(副隊長、55歳)　樋上嘉秀(55歳)
岩崎洋(39歳)　野沢井歩(34歳)　古谷朋之(26歳)　連絡官　成天亮(59歳)

▲サンサンの招待所、樋上(左)と古谷隊員

第８回　中国登山研究会報告

ＨＡＪ主催による恒例の『中国登山研究会』は、今年第８回となり東京・池袋の豊島区民センターで開催された。

研究会には、北海道から広島まで全国から35名の参加をみた。

ＨＡＪ酒井國光会長の開会の挨拶の後、研究会日程に入った。

９時30分～11時『中国登山の現状と中国ヒマラヤの紹介』

ＨＡＪ山森欣一理事長から、中国登山の申請のアウトラインの説明と留意点について例を交えて紹介があり、続いてＨＡＪが登山した青海、新彊、四川、チベットの山々がスライドで紹介された。

11時～16時『登山隊報告』

昼食を挟んで、ＨＡＪの「カバン～ナムナニ（岩崎洋氏）、友誼峰（酒井國光氏）、チョム・カンリ（関根孝次氏）」、群馬岳連のシシャパンマ（名塚秀二氏＆星野龍史氏）の報告がスライドによって報告された。

研究会の日程終了に当たり、尾形好雄常務理事の挨拶で閉会となった。

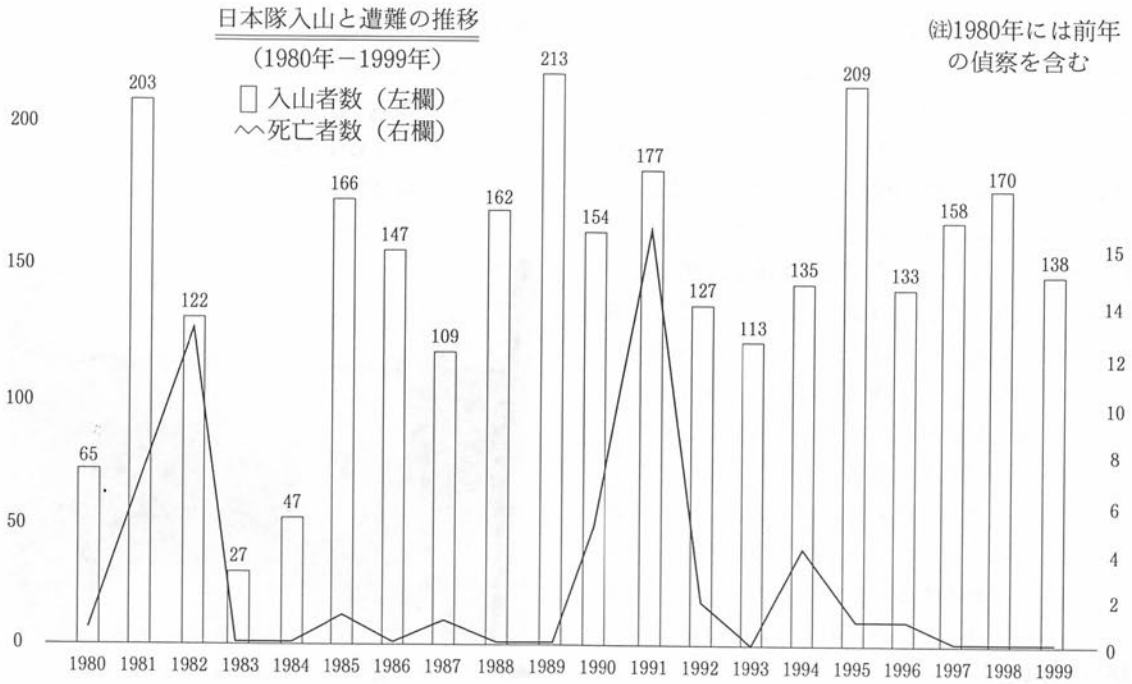
1999年の概観

1900年代最後の年となる99年は、中国領ヒマラヤに登山したのは、別表のとおり30隊145名であり、これは、99年に全ヒマラヤに入山した登山者の約40％を占めることになる。

8000ｍ峰では、群馬岳連隊がシシャパンマ主峰を久し振りに登頂した。ちなみに『8000ｍ峰14座』にカウントされるのは、言うまでもなく主峰であり中央峰ではない。これは衛星峰をもつ全ての峰にあてはまる。チョモランマには、小塚和彦が登頂。チョー・オユーには、９名、シシャパンマ中央峰にも６名が登頂した。ガッシャーブルム２には、立大隊が挑戦したが、雪崩のため断念した。谷川隊は、シシャパンマの南西壁を断念した。

7000ｍ峰では、領土問題に巻き込まれたＪＡＣ隊が、ガンカル・プンスムを断念し、新しい隊を組んで北にあるリャンカン・カンリの初登頂に成功した。ＨＡＪ隊はナムナニの北面から東面をアルパイン・スタイルで登攀し、西面を下降するというシンプルな登山を敢行した。

（山森欣一）



未解禁地域の新事情

ＣＭＡから1999年７月15日に入った情報。

「中国政府関係部門の規定によると」

1.外国人が中国の未解禁地域に位置する未開放の山峰に挑戦する申請を行うと同時に、参加人員の名簿、旅券番号、日程、入山路線などを提供すること。上記の書類が揃わなければ、許可申請に対処しません。

2.未解禁地域に位置する未開放の山峰の登山登録料金は、従来中国登山協会が公表した未踏峰のそれとは区別があります。中国登山協会は中国の政府関係部門の規定に基づいて登山登録料金を徴収する。

3.西蔵東部は、中国自然保護地域になっています。今後、当該地域の入域は非常に難しくなります。(撮影、学術調査、記者等)。日本人登山者の当該地域の入域も半年前に申請書を提供すること。

4.上記事情の責任担当者は張江援、趙建軍です。

コック、撮影料、請負制など

1999年２月７日ＨＡＪ主催による「中国登山研究会」席上に於て、中国登山協会代表団から下記のような見解が示された。

（１）コックについて

中国側要員である連絡官、通訳のためのコックは雇用しなくてよい。登山隊隊員用として必要であれば手配する。

（２）撮影料について

営業用ではなく、登山隊の資料のためにホームビデオにて撮影する場合は、現行料金の半額とする。無料とすることについては、他の関係部門との絡みがあるため代表団としては回答できない。

（３）シェルパの入国時の費用徴収について

現在、チョモランマ、チョー・オユー、シシャパンマ登山の費用については「請負制」を採用している。この中で、仕事として入国するシェルパ等については、歴史的な経過はあるため「禁止」措置はとらないが、登山隊が雇用する数によって１人当り1,000ドル～3,000ドルを徴収している。

ビザの取得

中国登山の基本的法律は、1991年８月29日に公布、施行された「外国人訪中登山管理法」である。同法第10条には、ビザについて「国家体育委（現在は、国家体育総局）の通知書によってビザを取得することになっている。このビザは、文化交流に対して公布されるエントリービザの一種であり、ビザ表面に「Ｆ」との表示がある。これに対して一般旅行者が取得する観光用のビザには「Ｌ」との表示がある。登山には必ず「Ｆ」ビザの交付手続きが必要である。

最近、チベットや新彊、四川をとおして議定書を交換した登山隊の中には、「Ｌ」ビザで登山し、そのビザの写真を報告書に掲載している隊もある。最悪の場合は、現地でトラブルに巻き込まれることもあるので必ず「Ｆ」ビザを取得すること。

また、ネパール（ザンムー）やパキスタン（クンジュラブ峠）から入国する場合は、日本でビザを申請する時点で、中国に入国する場所を予め指定するように中国側に要請しておくと便利である。

ＣＭＡから招待状が届いたなら、必要書類を揃えて旅行代理店へビザ申請を依頼する。登山隊側で用意する書類は、パスポート、写真一枚、各隊員の住所、電話番号、勤務先名、勤務先住所、電話番号などでパスポートに記入されている以外の事項は別途列記しておいた方がよい。旅行代理店では各隊員の必要事項を記載したビザ交付申請書を作成し、大使館に提出する。

大使館などに公電が入っていれば、通常の場合申請して一週間以内には、ビザを取得できる。しかし、日本の祝祭日や、中国の祝祭日などがあるので、招待状の届くのが遅かった場合は、申請を慎重に行わなければ出発日に間に合わないこともある。急ぐ場合は特急料金を払えばよい。

エントリー・ビザは、一回の入出国のみ有効であり、発行日から３ケ月以内に入国しなければ失効する。ビザの有効期間は、入国してからビザに表示されている期間である。ビザ上に60日間となっていれば、中国には入国してから60日間滞在できる。交付手数料は3,000円である。

外務省への提出書類

外務大臣官房文化交流部長宛	願い書	１部
〃	念　書	１部
和文の登山計画書		１部

以上を大臣官房文化交流部文化第二課に郵送すると、北京の日本大使館宛送付される。尚、計画

書には、昼夜連絡のとれる人の電話番号を必ず記載すること。

1999年 中国領ヒマラヤ入山一覧表

	山　　名	標高		派遣母体	隊長名	数	ルート		備　考
1.	チョモランマ	8848	春	公　募	ブライス	2	北　稜	○	5/2小塚和彦が登頂
2.	〃	〃	春	イタリア	セルジオ	1		×	石川富康が参加
3.	〃	〃	春	公　募		1		×	オサムラ
4.	〃	〃	春	公　募	ギ　ア	1		×	福沢勝幸が参加
5.	チョー・オユー	8201	春	公　募		1	西北西	×	高橋伸二が参加
6.	〃	〃	秋	ファイト	坂本　正治	4		○	全員登頂
7.	〃	〃	秋		谷川　太郎	4		○	9/28全員登頂
8.	〃	〃	秋	公　募		2		○	アラヤマタカオが登頂
9.	〃	〃	秋	公　募	ブライス	1		×	ホシコサダオが参加
10.	〃	〃	秋	公　募		1		×	大久保由美子が参加
11.	ガッシャーブルム2	8035	夏	立教大学	鯵坂　青青	7	東　稜	×	6,750m（C4）で断念
12.	シシャパンマM	8027	秋	群馬岳連	名塚　秀二	8	北東稜	○	10/29。主峰登頂は久し振り5名登頂
13.	〃	〃	秋		谷川　太郎	4	南西壁	×	
14.	シシャパンマ中央峰	8008	秋	ゴリラ	安村　　淳	4	北東稜	○	3名登頂
15.	〃	〃	秋	JAC東海	小川　　繁	4		○	3名登頂
16.	ナムナニ	7694	秋	HAJ	山森　欣一	6	北　面	○	初登攀。グナ・ラ(6,902m)に5名登頂
17.	ムスターグ・アタ	7546	夏	御殿場	稲葉　高一	5	西　稜	×	
18.	〃	〃	秋		恩田真砂美	2		○	2名登頂
19.	リャンカン・カンリ	7535	春		伊丹　紹泰	11	北　稜	○	5/9に5名初登頂、5/10に5名登頂
20.	ニンチン・カンサ	7206	春		奥田　仁一	3	西　面	○	5/30、3名登頂
21.	チョム・カンリ	7048	夏	HAJ	関根　孝次	8	南　面	○	8/15、3名登頂
22.	ティパ・カンリ	6846	夏	学習院大	橋本　　實	3	偵　察		コネカンリ(6,347m)も偵察
23.	カバン	6717	秋	HAJ	山森　欣一	7	東　面	×	6,550mで断念
24.	カシタシ	6619	夏	信高山岳	飯沼　健樹	3	偵　察		5,300mまで
25.	カンディ・スミ	6214	夏	川崎教員	坂原　忠清	4	東　稜	○	8/1、3名が初登頂
26.	東カンツァーリ	6167	冬	日中合同	増山　　茂	8	南東稜	○	初登頂
27.	レッド・メイン	6112	秋	学習院大	棚橋　　靖	11	西　稜	○	10/5に3名初登頂
28.	チュング・ローズ	5980	夏	中高年	伊東　　亨	9	?	○	8/25,26に9名が登頂
29.	シュエバオ・ディン	5588	秋	JAC学生	宮崎　紘一	13	南　稜	○	9/11と12に6名登頂
30.	ユゥイ・フェン(友誼峰)	4374	夏	HAJ	酒井　國光	7	西　稜	○	4,100mまで

総計30隊145名。(8000m15－45,　7000m6－35,　6000m6-36,　5000m2－22,　4000m1-7)

中国登山・日本隊21年の記録集計表

（2000年１月11日：山森欣一作成）

（注）左：隊数、右：人数、（　）内は死亡。

	年	8,000m峰	7,000m峰	6,000m峰	5,000m峰	合　計
01	1979	1　9				1　9
02	1980	3　43 （1－1）	2　13			5　56 （1－1）
03	1981	3　16	6　74 （2－11）	4　43	5　70 （1－1）	18　203 （3－12）
04	1982	3　57 （1－2）	5　44 （3－3）		2　21	10　122 （4－5）
05	1983	1　17		1　2	1　8	3　27
06	1984		2　8	1　12	3　27	6　47
07	1985	2　20 （1－1）	8　51	5　57	5　38	20　166 （1－1）
08	1986	1　1	12　108	1　12	2　26	16　147
09	1987	4　44 （1－1）	4　35	3　30		11　109 （1－1）
10	1988	5　78	2　18	7　52	1　14	15　162
11	1989	4　38	7　65	7　71	3　39	21　213
12	1990	4　63	5　38 （2－5）	4　48	1　5	14　154 （2－5）
13	1991	5　51 （2－3）	6　58 （1－1）	4　33 （1－11）	3　35	18　177 （4－15）
14	1992	4　42 （1－1）	5　47 （1－1）	4　27	2　11	15　127 （2－2）
15	1993	2　15	4　41	4　57		10　113
16	1994	4　28	8　56 （1－4）	4　32	2　19	18　135 （1－4）
17	1995	6　73	4　45	7　81 （1－1）	1　10	18　209 （1－1）
18	1996	6　41 （1－1）	8　46	5　46		19　133 （1－1）
19	1997	6　22	12　87	3　29	3　20	24　158
20	1998	9　39	11　77	5　25	2　29	27　170
21	1999	15　45	6　35	6　36	2　22	29　138
合　計		88　742 （8－10）	177　946 （10－25）	75　693 （2－12）	38　394 （1－1）	318　2775 （21－48）

地域ニュース

《ネパール》

エヴェレスト標高新説認めず

カトマンズ発2月1日のロイターによると、ネパール土地改革管理省は1日、声明を発表し、世界最高峰エヴェレストは従来より2m高いとするアメリカ地理学会などの説は認められないとの考えを示した。

アメリカ地理学会とボストン科学博物館は昨年、衛星を用いた全地球測位システム（GPS）による測量結果として、エヴェレストの標高が8,850mだったと発表した。

しかし、同省の声明は、新しい測量結果を、技術的側面から分析する必要があるとし、「現在の8,848mを公式の標高とするべきだ」と主張している。

大阪山の会が、ナラカンカール峰へ

この数年西ネパールに集中的に入域している大阪山の会では、2000年夏にナラカンカール(6,062m）に登山隊を派遣する。同峰はナムナニ峰の南東にあり中国との国境線上になる。同隊は更に南東ある山群の最高峰6,521m峰の東峰も探る予定。隊の構成は、大西保隊長以下10名程度となる。

《パキスタン》

パキスタン大使に沼田貞昭氏

政府は2月15日の閣議でパキスタン大使に沼田貞昭（ぬまた・さだあき）氏（56歳、外務報道官）を充てる人事を決めた。発令は2月16日付。

BOOKS

TAKE IN TAKE OUT

1994年HAT－Jから日本初の「山岳環境の汚染を防ぐため」のテキストが「テイクイン、テイクアウト」として刊行された。

このテキストは、主にヒマラヤ登山隊向けに、余分な物を持ち込まない（テイクイン）、持ち込んだ物は持ち出す（テイクアウト）ための具体的な方法を解説したものである。

最近の登山報告書を見るとほぼ半数に、テイクイン、テイクアウトの結果は報告されるようになった。それにしてもまだ半数である。これからヒマラヤ登山を始めようとする登山者や、インターネットで直接ガイドの下で登山するメンバーに、テイクイン、テイクアウト運動を理解してもらい現場で実施してもらうためにも、もっともっと多くの知恵の結集が必要であり、声が必要だろう。

今回の改訂版には、ネパール、中国、インド、パキスタン、北米、南米、ロシアなどの国々の環境に関する規則などを盛り込み、初版から一段と内容の濃い物となっている。

B6判　80頁　　問い合わせ先：HAT－J
〒113-0021 東京都文京区本駒込1－1－17
本駒込SOビル903号 ☎03-3828-6872

トピックス

ヒマラヤ登山者アンケート調査

激動する21世紀のヒマラヤ登山に対して、どのような対応をしていくのか。既存の山岳団体ではそれぞれ個別に対策を検討している中、HAJの呼びかけにより、日山協、労山、JAC、HAJの4団体が共同して、「ヒマラヤ登山者アンケート調査」を実施することに合意した。

2月3日に第1回実務者会議が、HAJ事務所にて開催され、アンケート調査の目的、対象者、内容、費用分担、実務日程など具体的な協議が行われた。今後月1回程度の協議を行い、5月下旬にアンケート調査を実施する予定。

各団体の実務担当者は下記のとおり。

（日山協）　八木原圀明、尾形好雄
（労　山）　近藤和美、　宮崎　孝
（JAC）　増山　茂、　坂井広志
（HAJ）　山森欣一、　野沢井歩

AAJ編集長、ベックウィズ氏が来会

ＪＡＣの招きで訪日されたアメリカ・アルパイン・ジャーナル（ＡＡＪ）の編集長として活躍中のベックウィズ氏（31）が、２月15日本会事務局を訪問された。氏は1994年ＨＡＪ隊が初挑戦した中国、チベットのルンポ・カンリに昨年イギリス隊に参加して登山し、中国領ヒマラヤに興味を寄せられている。

当日、ＪＡＣ中村保氏、熊崎皆子氏と共に訪問され、本会から山森理事長、中川常務理事、寺沢評議員と懇談した。席上、本会から30周年記念誌、記念楯をプレゼント。氏からＡＡＪ最新号がプレゼントされた。又、中国登山に興味をもたれる氏のために特に英訳した「中国登山20年小史」をはじめ「日本隊ヒマラヤ登山48年」、「カバンからナムナニ登山」など多くの資料を提供し、中国領ヒマラヤの主な山々をスライドで紹介した。

事故と環境対策研修会のお知らせ

ＨＡＪ主催による「第７回　高所登山　事故と環境対策研修会」が下記のとおり開催される。環境部門については、昨年に続いてＨＡＴ－Ｊが担当する。

記

1．日　時　2000年４月２日（日）９時～17時
2．場　所　豊島区民センター　☎03-3984-7601
3．参加費　3,000円
4．申込み　ＨＡＪ事務局（開催要項送ります）
5．内　容　雪崩からいかに逃れるか／高所に潜る危険と遭難事故例／人間の体の仕組みと高所障害／テイクイン、テイクアウト

東京集会のお知らせ

日　時　3月27日（月）午後７時～
内　容　ヤンラ・カンリについて
場　所　ＨＡＪルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車４番出口から地上に出て右へ徒歩２分）又は、ＪＲ大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面２つ目の東池袋４丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩２分）

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN
岳人
毎月15日発売（日・祝日の場合は前日）定価700円

■本誌の年間購読ご案内
本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。
直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。
郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。
お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

2000年	特　集
★ 1月号	雪山入門　日本の山を楽しむために
2月号	現代山岳スキー　思想・用具・記録
★ 3月号	日帰り縦走、ひと味違うハイキング
4月号	日本列島、恵みのブナの森を訪ねて
★ 5月号	陽光の日本アルプス
★ 6月号	日本全国、知られざる花の名峰
7月号	夏こそ、海と島の山旅
8月号	はるかなる源流の峰々へ
9月号	一度は泊まろう静寂の山小屋
★10月号	紅葉のみちのくの山並み
11月号	冒険、修験、岩塔の山
12月号	野生動物と出会う山

（★は特大号・800円となります）

東京新聞出版局（中日新聞東京本社）〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674(直)
全国の書店で発売中／中日新聞販売店でも取りつぎます

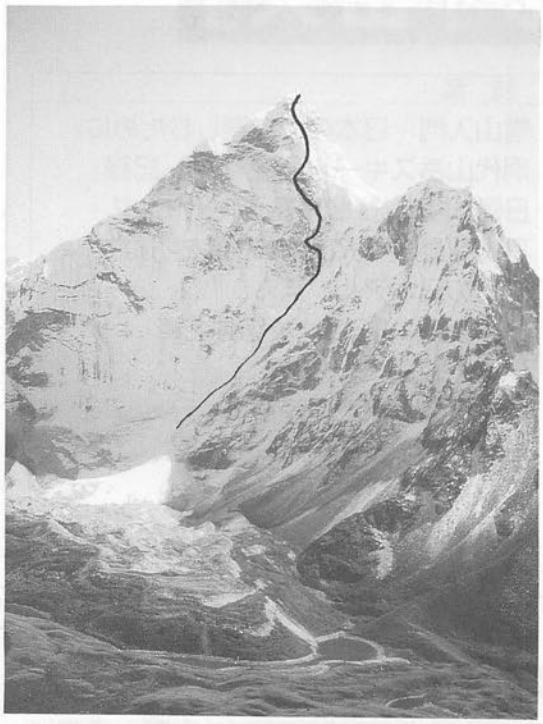
トマジ・フマル

スロヴェニアが生んだ新たなヒマラヤン・ヒーロー

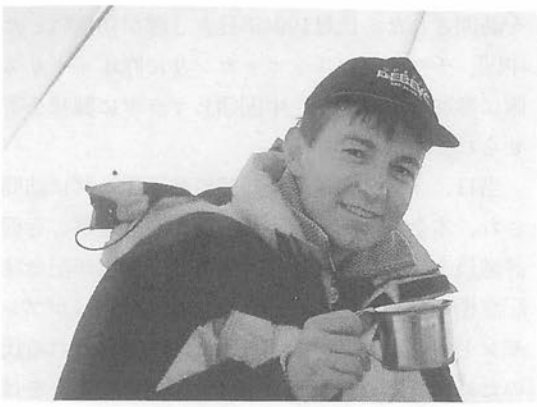
昨年のヒマラヤ登山界最高の成果はダウラギリⅠ峰（8167m）南壁の単独登攀である事に間違いない。それを為し遂げた男の名はトマジ・フマル若干30歳。トモ・チェセンにつづき旧ユーゴスラビアの小国スロヴェニアが生んだ今世紀最後のヒーローだ。日本ではあまり知られていない彼の輝かしいヒマラヤ登山歴を紹介したい。

トマジ・フマルのヒマラヤデビューは1993年ネパールのガネッシュⅤ峰、1980年の慈恵医大ルートをアルパイン・スタイルで登った。翌、95年の春、頂上からのスキー滑降を目標とするチームの一員としてアンナプルナⅠ峰（8091m）に北面から挑み5月6日に登頂。26歳で8千m峰のサミッターとなった。

1996年春、フマルは同じスロヴェニア人のヴァンジャ・フランとともにアマ・ダブラム（6812m）にやってきた。今回は新ルート、アルパイン・スタイルで登ることが目標であり、トレッキングルートからよく見える北西壁から見事に成功した。この



▲アマ・ダブラム北西壁



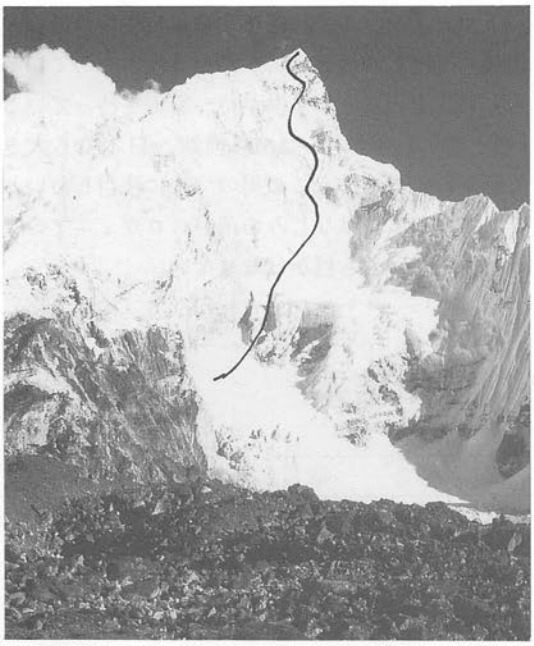
▲トマジ・フマル（H・Pより）

の登山は、1996年最高のクライミングのひとつとの評価を得ている。この年の秋、スロヴェニア山岳会は若手の育成の為に、西ネパールにあるアピ（7132m）、ボバイエ（6808m）、サイパル（6775m）の3つの山の許可を取り登山隊を派遣した。この隊はアピ南東壁、ボバイエ北東壁、サイパル南壁と急峻な岩壁に一撃で新ルートを拓き、スロヴェニア・クライマーの実力を世界に知らしめた。その中でフマルは、未踏のボバイエに単独で挑み、10月31日午前1時半に登攀を開始、翌日午後1時2500mを登りきりこの山の初登頂をものにした。そして、この時すでに彼には次の目標が明確に決まっていた。

1997年9月10日フマルは故郷スロヴェニアを出発。ネパールへと旅立った。目標はプモリそしてヌプツェ西壁である。

エベレスト街道のトレッキングの終点、カラパタールから眺める世界最高峰は、世界でもっとも有名な山岳景観かもしれない。その主役エベレストの右手、主役の重量感を引き立たせる名脇役がヌプツェだ。その最高点を頂点に三角形に美しく広がる壁がヌプツェ西壁だ。登られてしまえば、氷雪が多く付着しており、驚くほど困難な岩壁ではないかもしれないが、多くの人々にとって美しい景観でしかなかったあの壁の登攀の対象としたその目も、登攀技術同様に非凡である。下山後に彼は「あの豪勢な壁に魅入られてしまったんだ。」

▼ヌプツェ西壁



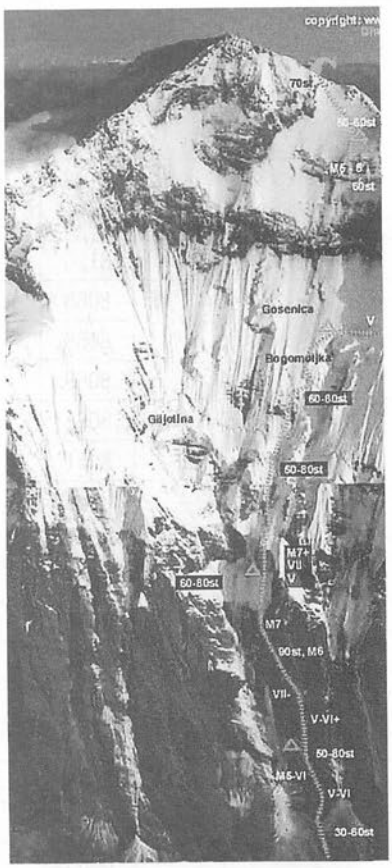
と語った。1990年代でもトップレベルの登山だ。

最大の目標の前に91年にバギラティⅢ峰（6545m）西壁ダイレクトルートの他、パタゴニアで数々の困難な初登攀を物にし、エベレストの頂上にたった事もあるヤネズ・イエグリッチと、8千m峰14座を4人目に完登したメキシコ人、C・カルソリオというユニークなチームはまず最初にロブジェ東峰（6119m）北東壁を9月29、30、10月1日の3日間で登攀。続いてプモリ南東壁にむかったが、スロバキア隊の救助に時間をとられ平凡なルート（？）を登ったに過ぎない。準備が整ったところで、フマルとイエグリッチは最後の目標に向かった。

この印象的な壁を登るにあたり、二人は下部のアイスフォールでロープを結んだだけで、壁の中ではお互いに単独で行動した。安定した確保点が得られないのだから当然との判断もあるだろうが、これは一つの狂気に思える。しかし、それなくしてこの登攀はあり得なかったとも言える。10月27日に登攀をはじめ、31日に頂稜に先に抜出たイエグリッチは頂上付近から転落行方不明となってしまう。ヌプツェ北西峰（7742m）に登頂後、フマルは困難な下降をしいられ凍傷を負いながら下降、11月2日の未明に氷河で仲間に迎えられた。

1998年フマルはヨセミテ・エルキャピタンのレティシェントウォール（A5）を単独登攀した。彼等が母国で行っている登山のグレーディングに自信をもった。

そして昨年秋、フマルはローツェ南壁とともにヒマラヤ最大の岩壁のひとつダウラギリⅠ峰南壁に挑戦した。この壁に既に1980年に当時はユーゴスラビアの一部であったスロヴェニアの先輩によって南壁右手にルートが拓かれていたが、今回はさらに中央のラインを頂上まで直登しようという野心的な計画だった。北東稜で順化活動のあと南壁側に移動。10月25日に登攀を開始。下部岩壁で雪崩、落石に悩まされ、Ⅶ級の岩登りや、モダンミックスのきわどい登攀が強いられて時間を取られ、上部岩壁にはばまれると右手にトラバース。7300m地点で78年に群馬岳連が初登した南東稜に抜け、11月2日8000m付近から凍傷の危険から頂上をあきらめ北東稜にトラバースしてそのまま下降した。その後3日にサポートチームの手配したヘリコプターにひろわれポカラに戻った。この登山はBC



▲ダウラギリ南壁

サポートチームや撮影チーム、ホームページでも毎日の登攀の模様が伝えられた。雪崩が炸裂して流下するルンゼの脇の岩稜を登攀し続けるフマルの姿、南東稜に抜け出る姿などが超望遠レンズで撮影され、その日のうちにホームページに掲載された。ローツェ（8516m）南壁、疑惑の登攀の後ヒマラヤからすっかり足をあらってしまったトモ・チェセンの教訓が、こうしたスタイルを生み出したのだろう。

http://www.humar.com

トマジ・フマル、1969年2月18日生まれの現在31歳。高層ビルの建築にかかわる仕事をしているらしい。妻と二人の子供が待つ家庭を持っている。「岩と雪」が今もあったなら当然、日本でも大きく騒がれたであろうこの男の今後に注目したい。そして、日本にはなじみの薄いスロヴェニアのクライマー達からも目がはなせない。

（中川　裕）

1999年パキスタン登山結果

	山　名	標高	国	隊長名	数	結果
1	K 2	8611	G登攀クラブ	藤原　拓夫	8	×
2		8611	韓国	Hyeng Chil Lim	7	×
3		8611	イタリア	Manual Luggli	11	×
4	K 2	8611	イタリア	Waldemar Niclevicz	5	×
	ガッシャーブルムⅠ峰	8068				○
	ガッシャーブルムⅡ峰	8035				○
5	ナンガ・パルバット	8126	ドイツ	Peater Guggemos	10	○
6		8126	コロンビア／ドイツ	Volker Stallbohm	5	×
7		8126	労山	近藤　和美	7	○
8		8126	福岡登高会	大石　義豊	9	×
9	ナンガ・パルバット	8126	スペイン	Albert lnnurratgi	4	○
	トランゴタワー	6245				
10	ナンガ・パルバット	8126	韓国	Han Kyu Yoo	6	○
11	ガッシャーブルムⅠ峰	8068	韓国	Byong Chul Lee	8	○
12		8068	スペイン	Oriol Garcia Farre	6	×
13		8068	フランス	Rambert Jamen Les	3	○
14	ブロード・ピーク	8051	オーストリア	Edward	14	○
15		8051	スイス	Hans Von Kanel	5	○
16		8051	アメリカ	William F.Vipond	7	×
17		8051	フランス	David Jonglez Falchen	6	×
18		8051	チ　リ	Claudio Galvaz Santibanes	6	○
19		8051	ドイツ	Ralf Dujmovits Staai	14	○
20		8051	チ　リ	Rodrigo Francisco Viviance	3	○
21		8051	韓国	Im Kong Tack	15	○
22		8051	スペイン	Josu Perede Leseta	9	○
23	ガッシャーブルムⅡ峰	8035	オーストラリア	Walter Zoner	7	○
24		8035	韓国	Jong Seung Lee	11	○
25		8035	アメリカ	Daivid Hamilth	5	○
26		8035	江北山の会	細田　一郎	1	×

27	ガッシャーブルムⅡ峰	8035	スペイン	Oscar Cadiachi	12	○
28		8035	スペイン	Felix Gveipo Vilar	11	○
29		8035	スペイン	Francisco Jose Geerlich	8	○
30		8035	韓国	Lee Byung Gab	5	○
31		8035	フランス	Bouchard Pierre	4	○
32		8035	アメリカ	Chrisine Feld Boskoff	11	○
33		8035	フランス	Lassalle Jean Francoise	12	○
34	ガッシャーブルムⅣ峰	7925	韓国	Jae Soon Kim	12	○
35		7925	アメリカ	Steve Swenson	6	×
36	バツーラⅠ	7855	福岡山の会	稲永　篤	5	×
37	クンヤン・キッシュ	7852	同人パハール	飛田　和夫	3	×
38	マッシャーブルム	7821	ロシア／アメリカ	Lev Loffe	3	×
39		7821	富山岳連	川端　聡	11	×
40	スキャン・カンリ	7544	スイス	Urs Wiget Rega-Ali	15	×
41	プマリ・チッシュ	7492	イギリス	Roger Payne	2	×
42	ムチュ・チッシュ	7453	スペイン	Luis Miguel Lopez	6	×
43	サラグラール	7394	イギリス	Ken Findlay	7	×
44	ミムヒル・サール	7343	めっこ山岳会	武田　澄人	5	×
45	バインター・ブラック ラトックⅢ ラトックⅣ	7285 6949 6456	ドイツ	Alexander Huber	4	○
46	ディラン	7266	オーストリア	Michael Koblmuller	10	○
47	スパンティーク	7027	フランス	Bouisson Marc	3	×
48	サンゲマール・マル	7050	イギリス	Allan Pikington	6	×
49	スパンティーク	7027	ドイツ	Dieter Kozlowski	8	○
50		7027	バーバリアンクラブ	野沢井　歩	6	○
51	コズ・サール	6677	仙台一高	山形　一朗	8	○
52	ピール・ピーク	6363	パキスタン	Nasir Awan	10	○
53	サカルサール	6272	横須賀山岳会	宮澤　章	4	○
54	トランゴ・ネームレスタワー	6257	オーストリア	Radner Kurt	4	×
55	トランゴ・タワー	6252	ドイツ	Thomas Tavander Morister	6	×
56	グレート・トランゴ	6251	ロシア	Alexander Odintsov	5	○
57		6251	アメリカ	Mark Synntt	7	○
58	トランゴ・タワー	6251	スイス	Roux Frederic	4	○
59	トランゴ・タワー	6245	スペイン	Lnaki Gomez Perez	4	×
60	トランゴ・タワー	6231	ノルウェー	Robert Caspeeson	4	×
61	トランゴ	6231	イタリア	Wondrance IVO	5	○
62	ラトックⅤ	6190	鉄腕モトム	大宮　求	2	×

資料提供・日パ旅行社

※死亡事故・K2のイタリア隊で1名、ブロード・ピークの韓国隊で1名、ディランのオーストリア隊で2名、そしてバツーラⅠ峰で福岡隊の3名の計7名が遭難死した。

■ 寸 感 ■

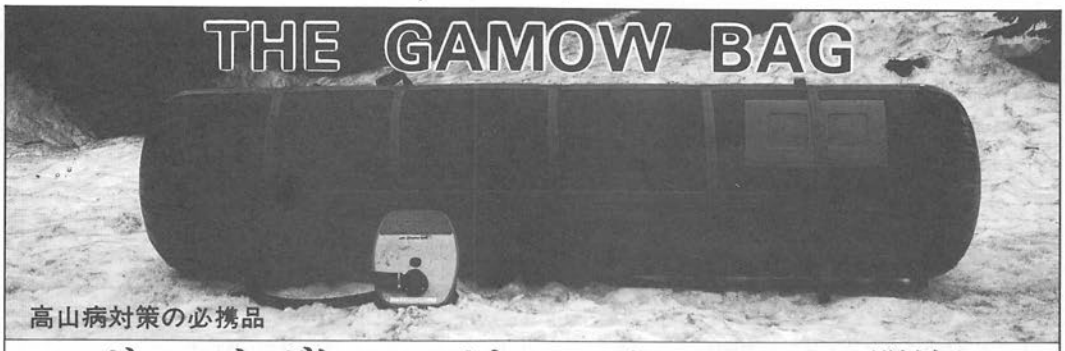
ＨＡＴ－Ｊから、テイクイン、テイクアウトの改訂版が刊行された。初版に各国の環境関係の規則を追加したものだ。約10年の啓蒙活動によってようやく登山者に定着しつつあるこの運動に水を差すような言動をしている若者がいる。改定版の刊行を機にＨＡＴ－Ｊの奮起を期待したい。（Ｙ）

事務局日誌（２月）

３日（木）　登山４団体ヒマラヤ登山者アンケート調査実務者会議（ＨＡＪルーム、山森、野沢井）
５日（土）　若尼峰隊合宿（ルーム）
６日（日）　第８回中国登山研究会（豊島区民センター35名）
７日（月）　アテネ書房と「ヒマラヤへの挑戦」について協議（山森）
９日（水）　ヒマラヤ340号発送
10日（木）　事故と環境対策研修会会場申込み
15日（火）　アメリカ山岳会、ＡＡＪ編集長Ｃ．ベックウィズ氏来会、懇談（ルーム、山森、中川、寺沢）
　　朝日新聞、武田剛記者取材（山森）
19～20日　第38回日山協海外登山技術研究会（於、大学セミナーハウス、山森）
26日（土）　東北海登研、チョモランマ壮行会、（仙台、酒井、山森）
27日（日）　北海道岳連、チョモランマ壮行会、（札幌、山森）
28日（月）　東京集会（20名）

ヒマラヤ No.341（４月号）

平成12年３月10日印刷　12年４月１日発行
発行人　山森欣一
編集人　山森欣一
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒170-0013　東京都豊島区東池袋４－２－７
萬栄ビル501号
電話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始！

加圧しただけで約２０００ｍ下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg)
●パルスオキシメーター
（血中酸素飽和度測定装置／重量380ｇ／単３乾電池４本使用／携帯型）

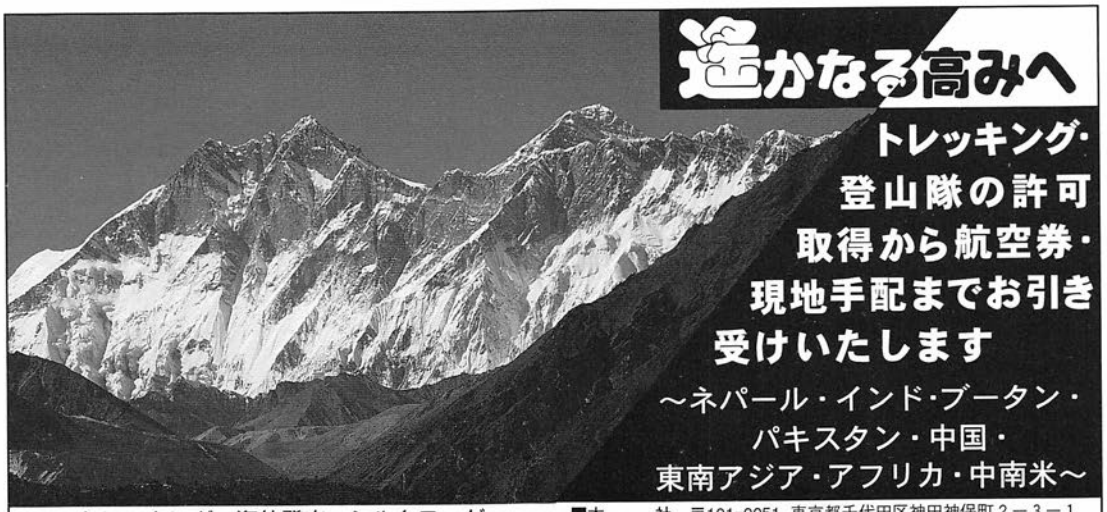
総代理店　：　日本メディコ株式会社
レンタル・販売問い合わせ先　：　株式会社 ティ・エッチ・アイ
〒135　東京都江東区木場２-５-７　ＫＨビル７階
ＴＥＬ：03-5245-0511　ＦＡＸ：03-5245-0510
（隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。）

TREASURE TOUR

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

――遠征隊、トレッキング、秘境への旅――
あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

マウンテントラベル株式会社 ☎03-3574-8880
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F
三井航空サービス代理店2452号



遥かなる高みへ

トレッキング・
登山隊の許可
取得から航空券・
現地手配までお引き
受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・
パキスタン・中国・
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア

株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本　社　〒101-0051 東京都千代田区神田神保町２－３－１
岩波書店アネックス５階
☎03(3237)1391(代)　FAX 03(3237)1396
■大阪営業所　〒530-0026 大阪市北区神山町６－４　北川ビル５階
☎06(6367)1391(代)　FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING／SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎221707、224248

●格安航空券はこちらに！
キャラバンデスク
キャラバンデスク東京(住所:本社内)　☎03(3237)8384(代)　FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内)　☎06(6362)6060(代)　FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい
(通話料無料)
0120-811395
西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp/)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP

ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェアー館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330
- 新潟プラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メイルオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219

ICI石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004